

北の大地から発信する宇宙への熱い思い

ー『北海道宇宙サミット2025』で感じた、宇宙ビジネスの現場の一端

公益財団法人中部圏社会経済研究所 常務理事・事務局長 大谷 祥吾

当財団では、2024年度より、ものづくり地域としての中部圏がこれからも持続的に発展するためには、自動車産業への集中的な依存からの脱却も含めた産業構造の転換が必要ととらえ、スタートアップ支援・育成を含めた「産業構造の転換を促すエコシステムの構築」に関する調査研究を実施している。本誌でもその研究会の模様を調査研究レポートとして複数回にわたり掲載しているが、ここでは、2025年10月に北海道帯広市で開催された宇宙ビジネスカンファレンス「北海道宇宙サミット2025」を視察してきたため、その様子をお伝えしたい。



十勝晴れに恵まれた会場（ベルクラシック帯広）



セッション1（宮本代表理事が登壇 左から2人目）

1. スペーステック

突然ですが、技術革新と特定分野の融合を表す便利な造語「〇〇テック」を、皆さんはいくつご存じだろうか？

ビジネス・金融系では、フィンテック（金融）、インシュアテック（保険）、リーガルテック（法律）などが有名。科学・技術系では、ディープテック（先端科学技術）から始まり、バイオテック（生物・医学）、ヘルステック（健康・医療）、アグリテック（農業）、フードテック（食料）からエデュテック（教育）まで、これ以外にも数え上げるときりがないほど新しいワードが生まれている。

その中でも、潜在的な市場規模が最も大きいテック市場といえば、スペーステックであることに疑いの余地はなかろう。なぜなら、宇宙機器産業に

加え、宇宙との通信が地上の各セクターと交わることで価値が創出される、その総和が宇宙産業であり、スペーステックであるのだから。

宇宙産業は大きく5つの領域に区分され（地上インフラ／ハードウェア開発・製造／探査・有人宇宙飛行／衛星データ・通信・測位／宇宙環境利用・整備）、三菱UFJリサーチ&コンサルティングの試算では、2024年の世界市場規模は68兆円、2030年には100兆円を超すとされる。これは頼もしい業界だ。

2. 北海道宇宙サミット2025

2025年10月9、10日の二日間にわたり、帯広市で開催された「北海道宇宙サミット2025」に参加した。このイベントは、2021年から毎年開催して

おり、今回で5回目を迎える。

今年は、当財団をはじめ、トヨタ自動車や中部航空宇宙産業センターなど、中部圏の企業・団体・自治体が招待され、「ものづくりの先駆者に学ぶ、宇宙産業の創出・育成」というテーマでセッションが開催された。

我々は今回初めて会場を訪れたのだが、この熱気は年を追うごとに盛り上がりを見せているようで、地元メディアの報道によると、初日午前中だけで約300人が来場し、夕方開催された交流会では500名近くの関係者が参加されたという。

以下では、このイベントを盛り上げ、北海道宇宙産業を牽引する3つのアクターを紹介したい。

（1）大樹町

はじめに、自治体である。今回会場となった帯広市の約60km南に位置する大樹町が、「北海道スペースポート（以下、「HOSPO」）の舞台である。帯広市を含む十勝地方と言えば、広大な農地や牧草地といった北海道特有の豊かな自然が特徴で、数年前に放送されたNHK朝ドラ「なつぞら」の舞台としても描かれた、まさに広大に開かれた平原が広がる美しい大地である。



大樹町観光WEBより

実は、この十勝地方の南部に位置する大樹町が、この地に航空宇宙産業を起こすことによる地域開発を真剣に取り組む始めてから、すでに40年が経過しているというのだから驚く。

そのきっかけは、1984年、当時の北海道東北開発公庫（1999年、日本政策投資銀行に業務を承継して解散）が、北海道地域振興ビジョンの報告書で提言した21個のプロジェクトのひとつに、「航空宇宙産業基地」構想が入っていたことであった。この報告書の中では、大樹町がロケットの発射基地として適している理由として、複数の要因を挙げている。

まず、東と南が海に開けていること。ロケットは東に打ち上げることで、地球の自転を利用してより遠くに飛ばすことができる。また、南向きに打ち上げることで、極軌道（南北を通る軌道）と並行に打ち上げることができ、この方向に衛星を打ち上げれば地球の自転と相まって、地球全体を網羅的に観測できるというという利点がある。このように、同じ基地から2方向に打ち分けできる射場は、世界でも有数らしい。

次に、周囲に人が少なく広大な大地が未開拓に開けていること。もともとこの地方は湿地が多かったために未開拓であったが、その中ではこの辺り一帯は地盤が強固であった。

さらに、近くに大きな港や空港がないことから、海路や空路が空いていること。ロケットの打ち上げには失敗がつきものであるだけでなく、切り離れたブースターが落下するため、発射時には周辺に航空機や船舶が入ってこないよう制限を掛ける必要がある。一面海とはいっても、航空機や船舶が多数航行するようでは困るし、どこの射場でも実際の打ち上げ時には、区間を立ち入り禁止にする措置がされる。

また、ロケットの打ち上げで最も難しいのは、打ち上げ後に姿勢を制御することである。姿勢制御の大敵が自然の雨風で、発射時には晴天であることが望まれるが、「十勝晴れ」という言葉があるように、この地方は平均日照時間の長さでは日本有数であることも大きい。

さらに、首都圏から射場まで、わずか2時間半で来られるという近接性がある。現在は、羽田ー帯広間の直行便が一日7便飛んでおり、所要時間片道100分。帯広空港から射場までは車で40分と

思いのほか近く、例えばオーストラリアにも開けた射場はあるのだが、砂漠のど真ん中にあるため、空港を降りてから車で数時間を要するという。

このように大樹町にはさまざまなアドバンテージがあるとはいえ、40年前（1980年代前半）といえ、朝ドラでは「おしん」が人気を博し、宇宙関連では、日本で衛星放送が開始され、アメリカではスペースシャトル「チャレンジャー号」が爆発事故を起こしたところである。宇宙が身近になったとはいえ、まだまだ、多くの日本企業や自治体行政が宇宙を産業として視野に入れる時代ではなかっただろう。大樹町の先見の明と、粘り強い取り組みには頭が下がる。

（2）SPACE COTAN株式会社（以下、スペースコタン）

北海道スペースサミットの事実上の主催者であり、大樹町のロケット射場HOSPOの管理運営を担っているのがスペースコタンである。大樹町や帯広信用金庫等が出資者となり、2021年に設立された。CEOには、全日空元社員でエアアジア・ジャパン社長も務められた小田切 義憲氏である。



挨拶する小田切社長

HOSPOは、民間に開かれたロケット発射場で、打ち上げしたい企業は誰でも使うことができる日本で唯一の射場であり、6月にはホンダによる再使用型ロケットの離着陸実験を成功させ（高度300mまで上昇したロケットがそのまま下降し着陸）、7月には台湾系の企業が初めてのロケット打ち上

げを行った（こちらはあえなく失敗したが、年内には再チャレンジを計画している）。日本で一番有名な種子島宇宙センターは、官製ロケット専用の射場であり、和歌山県串本町のスペースポート紀伊とともに、民間の宇宙港として期待を集めている。

また、HOSPOの特徴は、既述した地理的な優位性だけでなく、マルチユース射場であること。垂直に打ち上げるロケットだけでなく、スペースシャトルのような水平離着陸を行う飛行機型のロケットにも対応できる射場である。現在の技術では、ロケットエンジンを使って高度な宇宙へ到達させるのがエネルギーの一番効率的な利用方法であるが、昔のスペースシャトルのように、水平着陸の技術開発をしている企業もある。こちらの方が、機体の再利用を想定して作られるため、将来的にいまより高頻度でロケットを発射する時代になれば、水平離着陸用の滑走路を備えていることは、ロケット射場としては大きなアドバンテージになるであろう。



北海道スペースポートの未来図（HPより）

（3）インターステラ・テクノロジズ株式会社（以下、IST）

最後に紹介するのが、2019年に日本の民間企業として初めて、宇宙空間（高度100km以上）へロケットを到達させたスタートアップ、ISTである。

会社設立には堀江 貴文氏が関わり、現在も取締役として経営に関わっていることでも有名だが、それ以上に世間を驚かせたのは、2025年1月にトヨタグループと資本・業務提携に合意し、ウーブン・バイ・トヨタが約70億を出資すると発表した



IST本社（大樹町）
イベント前日には視察会が行われた

ことである。もちろん出資だけではなく、トヨタ生産方式など自動車業界の知見やノウハウを取り入れることで、ロケットを低コストで高品質、かつ量産可能なモノづくりへと転換させるという。すでにトヨタグループから10名以上の社員が出向等の形でISTに勤務している。なるほど、イベント初日の交流会では、トヨタ関連の方々が多数来場されていた。打ち上げを一度成功させるだけでも大変な技術と労力を要するであろうに、量産化まで見据えたビジョンを描いていることが民間ならではの行動だ。その後、文部科学省から追加交付金の決定や、JAXA宇宙戦略基金の採択も決まり、6月には小型衛星打ち上げロケットZEROをHOSPOの新たな射場から打ち上げすることを発表した。射場の完成を待って2026年秋冬の打ち上げを予定しているというから、今から楽しみである。

3. まとめにかえて

宇宙と聞くと、老若男女、ロマンを感じないだろうか。数年前には「宇宙兄弟」等のマンガ・アニメも人気を博したと聞くが、まだまだ現実には程遠い世界の話だと、わたしはこの会場に来るまで思っていた。しかし、当然のことではあるが、現場では行政・企業・住民が長きにわたり真剣に取り組んでいて、数年後には大きな飛躍を遂げているであろうことが十分に信じられた。ホリエモ

ンやZOZO創業者の前澤氏などが、こぞって宇宙に投資したくなる気分がわかる気がした。

最後に、このイベントのダイヤモンドスポンサーである株式会社日本旅行の展示を紹介しよう。日本旅行が紹介している宇宙旅行である。右は203X年に実現する（かもしれない）、北米への短期出張に使えるプラン。日本からニューヨークまで、ロケットによるフライト時間は1時間なのでその気になれば日帰りもできるが、このプランでは2泊3日にして中日を終日フリータイムに設定している。左は204X年、8日間の宇宙旅行だ。初日と2日目は事前準備に充てられるようだが、4日間はまるまる宇宙ホテルに滞在するようだ。ここまで見ていただければ、これまで宇宙と距離をとっていた方もロマンを感じていただけるのではないだろうか。



日本旅行のチラシ